

トマム・リゾート開発の影響

田中 一弘

たなか・かずひろ
1950年岡山生まれ。東大卒業後、大阪のコンピュタ販売会社に入社。16年間勤務し、90年6月現在、北海道占冠村へ移転。自然環境保護協会会員。

・リゾート開発の経緯

占冠(しむかつぶ)村は、北海道のほぼ中央、富良野の南約五〇km、日高と夕張の山脈に挟まれた場所に位置する。地名の語源はアイヌ語のシモカブで「はなはだ静かで平和な上流の場所」の意味とされている。面積は五七〇平方キロ、うち山林が九四%を占める。人口は現在二、〇〇〇人余りと少なく、主な産業はサービス業(リゾート産業)、農業、林業などである。

この村は、昭和三十年代には林業で栄えたが、その後は人口が減少し、昭和五十六年には道内で最も人口の少ない過疎の村となった。村では過疎化の歯止めとして肉牛や菜生産、山菜加工などに力を注いだが決め手とはならず、昭和五十年代の半ばにリゾート開発計画が持ち上がり、一九八二(昭和五十七)年より中トマム地区(一、〇一七ha)での開発が開始された。翌年暮れにはスキー場とホテルがオープンし、それ以降施設が次々と建設されてきた。現在ではホテル一棟、分譲マンション一棟、会員制ホテル八棟、スキー場(一七コース)、ゴルフ場(一八ホール)、造波プール等を抱え、人口二千人余りの村に一万人が宿泊可能な巨大リゾートとなっている。

八七年には富良野・大雪リゾート地域に含まれる形でリゾート法の承認を受けるに至り、また九一年には拡張計画として、上トマム、奥トマム、および南富良野町金の沢地区(計二、二八八ha)でのゴルフ場、ホテル、スキー場の建設が計画され、九一年十月より北海道環境影響評価条例に基づき、いわゆる環境アセスが始まった。九二年十一月には道のアセスとしては異例の、厳しい答申がアセス審議会より出され、事業者であるアルファ・コーポレーション(以下アルファと略)は拡張計画の修正を余儀なくされている。しかし、一年以上経過した現在でも事業者は修正評価書を提出しておらず、バブル崩壊によるリゾート会員権販売の低迷、過剰投資による資金計画の破綻により、九三年春には建設会社から施設の「仮差押」まで行われ、実質上の経営は銀行団が行うようになり、九三年暮れのボーナスは分割支給、二か月遅配の状態となり、リゾート拡張計画は環境面だけでなく、今や資金的にも全く見通しの立たない状況に陥っている。

・人口増の裏側

村ではリゾート開発により人口が増えたとされている。

八〇(昭和五十五)年には、一、六〇一人まで減少したが、九〇(平成二)年には二、七二一人まで増えている(国勢調査より)。しかし、中身を点検してみると九〇年の住民基本台帳による人口は一、七七一であり、約一、〇〇〇人が住民登録をしていないことになる。また村は五つの地域に分かれているが、地域別の人口で見るとトマム地区では一二四から一、三五〇と大きく増加しているのに対し、他の地域では若干の増減に留まり、この地域だけに偏った人口増であることがわかる。また、トマム地区の人口増は大半がリゾート企業に勤める二〇歳前後の単身者で、入社後二・三年で殆どが退職してしまうと言われている。住民登録をする者が少ないのもここに理由がある。このような地域に定着しない人口の増加は、それまでに築き上げられた地域社会を崩壊させかねない。また、地域別の人口増減の偏りは、例えば学校には、一方で複式学級化が迫られ、他方では教室の増設が必要になるとの問題が発生している。

・河川の水質悪化

既設の中トマムのリゾートから出される汚水は、

ゴルフ場の排水も含めて浄化処理をされた後、鶴川に放流されている。そして占冠村では鶴川の伏流水を飲料水として使っているのである。この鶴川の水質が九〇（平成二）年に初めて環境基準をオーバーし、翌九一年にも再びオーバーしてしまった。それまでずっと水質には問題の無かった鶴川が、リゾート開発とともに汚れてしまっていたのである。アルファは中トナム開発の際にも環境アセス書を提出しており、それによると排水はBOD一〇〇まで浄化処理をして放流するとなっていた。ところがトナム自然環境保護協会が調査したところ、実際の施設の浄化能力は三〇〇でしかなく、上川支庁の水質検査結果でも一〇〇を越えていたことが判明した。この時は拡張計画のアセス審議中でもあったので、道にこの点を指摘したところ、アルファはアセス審議会に対し「九三年度冬期迄には五〇〇処理施設を設置する予定です。放流水質が予定水質をたびたび越えたことについてお詫び申し上げます」と回答してきた。ところが、九四年一月現在でもこの処理施設は着工さえされておらず、道に問い合わせると環境アセスには強制力も罰則もないので、事業者の誠意に任せられないとの回答しか返ってこない状態である。これは、いかにアルファが無責任であり、環境に対する考え方が口先だけのものを示すと共に、道の環境アセス制度が穴だらけかをも示している。これに対しトナム自然環境保護協会では道に①早急に処理施設を建設するよう指導すること②約束を守らない事業者の拡張計画を撤回させることを文書で要望した。

・ゴミ処理問題

従来占冠村のゴミは規模の小さい埋立地で処理さ

れていた。人口から見ればごく普通の形態である。しかし、中トナムのリゾート開発が始まって以来、建設に伴う廃材を中心とした大量のゴミが発生し、この処理問題が村議会でもたびたび取り上げられていた。しかし村当局は長期的計画的な対応を行わず、その場しのぎとして八七年頃より無届けのゴミ埋立地を使わせるようになり、ついに九一年末にこれが発覚し、保健所からゴミ処理場の使用禁止命令を受ける事態となり、新聞紙上で大きく取り上げられることになってしまった。このあと村は四億円の巨費をかけて正式なゴミ処理場を造ったが、議会ではアルファに対し応分の負担（ゴミの割合からすると約六割）をしてもらうと説明していた村は、アルファとの話し合いの結果約二割を負担させるだけで終わってしまった。ここに示されているのは、村のゴミに対するお粗末な感覚と、アルファに対する甘い姿勢である。まるでリゾート企業の隷のような態度に怒りを感じたのは私だけではない。

村当局のゴミ感覚をあらわす例はほかにもある。村には九一年から使用されているゴミ焼却場があり、この建設に当たって村長は議会で「煙も臭いも出ない」と説明し、村民に対しても「鉄でも何でも燃える」と説明していた。これには聞いていた私のほうが恥ずかしくなるほどであった。また、九三年春に制定された村のゴミ処理条例では減量化や分別収集、コンポストの利用推進、それに大量のゴミに対する有料化などがうたわれている。ゴミの減量化や分別収集には住民の意識を高め、協力を得ることがキーポイントになるはずである。ところがその条例の内容は一〇か月以上経った現在でも村民に公報されていない。また有料化については、村の中で一番大量に出るアルファからのゴミは対象にならないと言う。

その理由はアルファが自分でゴミを焼却場まで運ぶからとのこと。しかし、ゴミ処理のコストは運搬の費用だけでないことは明らかであり、条例のどこを探してみてもそんなことは書かれていない。事件が発覚した後、保健所の指導で言葉だけは立派な条例を作ってみたものの、実際にはゴミ処理の重要性を何も理解していない村の姿がそのまま写し出されている。

村には過疎化脱却のため「アルファに来てもらったのだから」との意識が抜けず、対等な立場で物事を考えるとの姿勢が欠けている。こんな状態が続けば、それこそ村はアルファの植民地と化してしまうことになる。

・農業の衰退

中トナムの開発の際、この地域のある肉牛農家は牧場を売り、それまでの借金を返し、民宿経営を始めたそうである。中トナムには農業振興地域が有り、牧場はもちろん農地であった。これらの土地売買には法的な規制が掛けられており、どのようにしてこれら規制が解除されたのか、ある人に言わせるとかなりきわどいことが行われたとのことである。また、二次開発地域の上トナムでは、早い段階から農家に對し土地（もちろん農地）を抵当に、億に近い金をリゾート企業が貸し付けるという状態が生まれている。これは、農地の実質的な売買であり、農地法違反の疑いが強い。そして、この地域で今も一軒だけで肉牛経営にはげんでいる農家に、村もリゾート企業も土地を売るのが当然との姿勢が続いている。この農家はただただ牛を飼いたくて、七七（昭和五十二）年にこの地に入植した。当時村の入り口には「和牛の里しむかっぶ」との看板が立てられていた。

この頃村では畜産を村の産業の柱にしようとして色々な振興策を立てていた。また、村長は昭和六十二年に「上トナムでは今後二十年間はリゾート開発はしないので、生産に励んで欲しい。中トナムのリゾートでは、地場産業との連結を計る。」と言っておきながら、数か月後には農家に何の話もないまま上トナムの土地買収が始まり、村の繁殖センターが閉鎖されてしまう。その上、村は代替地の手当や以後の経営に関する事にも誠意のない態度しか見せていない。リゾートのためには農家を切り捨ててしまうような事が行われているのである。開発の始まる前には五軒あった上トナムの肉牛農家は、現在ではこの一軒だけになってしまった。環境アセスでは天然記念物のクマガラは菅巢木の周囲五〇〇mは護られるが、営農意欲を持った農家は護ってもらえないという皮肉な状況がうまれている。

リゾートなら地元の特産品をリゾート客に提供する姿が思い浮かぶ。占冠村でも開発が始まってすぐに畜産農家とアルファ、村との話し合いがあった。ここで、アルファは牛肉の特定の部位だけを特定の日に特定の量だけ届けることを要求した。しかし、畜産農家に残った部位を売る力はなく、結局話は実らなかつた。現在村の特産品で使われているのは、山菜ぐらいのものである。

このほかにも大量の宿泊客や日帰り客への給水確保の問題、地域振興へのリゾートの貢献度合い（雇用確保、税収増など）およびインフラ整備のための自治体負担（住宅、道路、学校、上下水道など）とのバランスなどがあるが、「トナムレポート」（九三年十一月、北海道自然保護協会）が詳しいので、ここでは控えたい。

・私のリゾート

私が占冠村に住むようになり、もう三年半になる。それまでの東京の団地暮らしから、山と川と畑にかこまれた一軒家に住み、越してきた当初は、村の人から「寂しくないかい」と何度も聞かれた。「いや、静かで気持ちの良いところですよ」と答えても、不思議そうな顔をされるばかりであった。二、三年は人の住んでいなかった家なので、最初は庭の草取りが大変で、でも、その抜いたあとから翌春には水仙やクロッカス、ルピナス、チューリップ、リコリスが顔を出し、芝桜も赤、白、ピンクの繡緞を広げ、テッセンが咲き、ライラックの香りに初めて出会い、近くの沢にはヤチブキが黄色い帯をなし、水芭蕉や座禅草も遅い春を待ちわびたように一斉に顔を出す。

夏になると、庭に面した大きなガラス窓にクモが巣を張りだす。見事なくらいに規則正しく丁寧に張っていく。張り終わるとその真ん中に、いつも頭を下に向けて陣取り、虫が飛んで来ると、足で縦糸をピンピンと引く張ってみて、獲物に間違い無いと知るやいなや、サササッと近づき毒針を刺す。獲物が動かなくなると、今度は糸を出し丁寧に獲物を包んでしまふ。お腹が減っているときは、それを抱えたまま引きずっていき、巣の中央に戻り、チュウチュウと吸いながら糸の揺れを監視し続ける。お腹がすいていなければ、包みはそこに置いたまま中央に戻っていく。クモは昼間は出てこない。鳥に喰われてしまうからだ。いつも夕闇が迫る頃、出勤して来る。そして明け方近くになると、巣をきれいにたたんで帰っていく。そんな様子を何時間も見つけ、人に話すと、案の定馬鹿にされてしまった。

夏はまた夜空が楽しい。星空の中に一人たたずみ、天の川を眺めれば、宇宙の中にいる自分をふと感じ

てしまう。身体がソクソクとする一瞬である。流れ星が走ったときは、天と言葉を交わしたような、そんな気持ちになる。

秋にはいつとき赤とんぼが空一杯に飛び交い、電線にはそれこそ足の踏み場もないくらい止まっている。その光景を見たとき、私は幼いころ岡山の田舎で赤とんぼをハエ叩きで追いかけていた時のことを思い出していた。何故か胸が一瞬痛くなるのを覚えていた。我が家の回りに飛んでくるチョウやトンボは私が近づいても余り逃げようとはしない。花の蜜を吸っているチョウの羽根を、手でつかんでみたことも一度ならずある。これが本来の習性なのかも知れない。

冬の雪は見事である。すべてを覆いつくし、キャンパスに変えてしまう。どこまでも続く動物の足跡をずっと眺めていると、追いかけて行き何が居るのか探してみたくなる。カケスやアカゲラがでてるのもこの季節である。豚の脂身を置いておくと、カケスは毎日のように姿を見せるようになった。アカゲラは、姿は見えなくてもコンコンという音ですぐに気が付く。二冬目にはかなり近づいても逃げなくなった。赤い腰巻きに白黒のコートが何ともお似合っている。

ここに書いた私の北海道での生活は、個人的な日常生活の中でのリゾート暮らしの様子である。豪華ホテルに泊り、ゴルフやスキーだけをするのがリゾートだというのは、あまりに一面的な考え方である。仕事などで都会に出掛け、慌ただしい時を過ごしたのちに帰ってくるときの占冠の風景が目に入ってきたときに感じるあのほっとする感覚は、まさしく生活の拠点をここに置いていることのあるしであらう。数年前東京から占冠に移り、リゾート企業に勤める

近所の人の奥さんは、今ではもう北海道を離れたくないと言います。四季それぞれに身の回りに自然が溢れたこの土地を、すっかり気に入ってしまったようである。もちろん生まれた時からここに住んでいる人たちも、ほとんどの人が同じ気持ちだろう。

アルファはトマムに五万人が宿泊できるリゾートを造るのが目標だとしている。人口二千人の小さな村にこんな巨大なリゾートは、どう考えても異常である。占冠村、いや北海道に暮らす人々の力量が問われようとしている。

